アルルのローマ遺跡とロマネスク建築

～ ゴッホが描いたアルルの風景 ～

南フランス・プロヴァンス地方には、古代ローマ関連の数多くの遺跡が世界遺産に登録されています。たとえば、『アルルのローマ遺跡とロマネスク建築（1981 年登録）』、『オランジュの凱旋門、ローマ劇場とその周辺（1981 年登録、2007 年範囲変更）』、『ポン・デュ・ガール（ローマの水道橋）（1985 年登録 2007 年範囲変更）』、『ギリシャ風のローマ神殿であるニームのメゾン・カレ（2023 年登録）』などがあります。ローマ時代の遺跡ではありませんが、『アヴィニョンの歴史地区：教皇庁宮殿、司教の建築物群、アヴィニョンの橋（1995 年登録）』もあり、プロヴァンス地方は世界遺産の宝庫です。

アルルの円形競技場

その中でも、「アルルの円形闘技場（長径約 133m×短径約 110m）」は、西暦 75 年頃に建設され、収容2万 5 千人を誇る闘技場で、現在もイベントなどで利用されています。西暦 100 年頃に建設された「ニームの円形闘技場（長径約 133m×短径約 101m）」は、ほぼ完璧に近い状態で保存されていて、世界遺産に登録されたのも不思議ではありません。「ポン・デュ・ガール」は、このニームへ水を運ぶために造られました。アルルとニームの距離は約 30 ㎞で、この近い距離にふたつの円形闘技場があることから、1世紀のプロヴァンス地方が古代ローマにおいて、いかに重要な地域であったかが分かります。世界最大級のローマのコロッセウム（長径約 188m×短径約 157m）は西暦 80 年に建設されたため、アルルの円形闘技場は、コロッセウムとほぼ同時期の建造物であると言えます。また、オランジュの遺跡もポン・デュ・ガールも同じ時代に造られたため、1世紀当時の古代ローマ帝国の繁栄ぶりが窺えます。プロヴァンス地方の古代ローマ関連の遺跡は、このように繋がっているのです。世界遺産を学習する際は、点と点を結び、歴史的な繋がりを理解しながら学んでいくと、その魅力がよりいっそう広がっていくと思います。

■ アルルの街

ローマ関連の世界遺産となっている街は、遺跡に支配されているような、どことなく重たい印象を与えてしまうことが多いのですが、アルルはそれとは対照的に「穏やかな印象」を持つ街です。その理由を考えてみると、遺跡の周りにはフランスの中世の佇まいを思わせる街並みが広がり、生活感に溢れ、とても居心地良く、感じられるからです。街はコンパクトにまとまっていて、道も平坦で歩きやすく、緩やかに流れるローヌ川は風情があります。アルルはとても落ち着いた印象を与える街です。また、プロヴァンス地方で最も人気のある街のひとつです。古代ローマの遺跡が最大の魅力であることは間違いありませんが、それ以外にも人気の理由があります。それは、このアルルに暮らした画家がいたからです。その人物こそ、ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ(1853 年～1890 年)です。

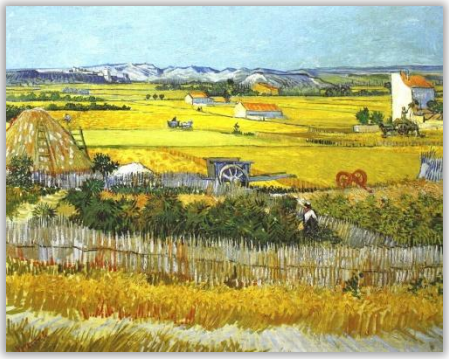
ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ
『自画像』1889 年／オルセー美術館蔵

■ ゴッホがアルルを選んだ理由

アルルは、ゴッホがゴーギャン(1848 年～1903 年)と共同生活をした街としても知られています。ゴッホがアルルを選んだ理由として、ジャポニスムの影響を受け、日本をイメージしたからだと一般的には言われていますが、それだけが理由ではなく、画家の目線でアルルを選んだ可能性もあります。アルルの気候は、冬のミストラル(プロヴァンス地方特有の季節風)を除けば比較的温暖で、夏は湿度が低く、30 度を超えても麦わら帽子をかぶれば、戸外での制作もできます。パリとは違い、晴天の日が多く、屋外での制作を好む画家にとっては理想的な場所です。また、街には高低差が少ないため、重たい絵の具箱も持ち運ぶのが楽です。アルルは人が少なく、人目を気にせずに描けます。パリのような都会の喧騒(けんそう)はなく、中世の面影を残す古い路地裏の街並みは、落ち着きを与えてくれます。このように、アルルは画家にとって条件の揃った街でした。

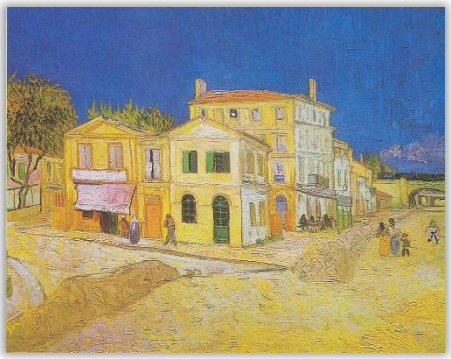
■ ゴッホ作品の誕生

ゴッホはオランダ出身の画家で、20 代の頃は、どちらかというと暗い印象の作品が多く、一般的にイメージされるゴッホの作品とは程遠いものでした。彼は一時期、ミレーに傾倒したこともあります。ゴッホが開眼したきっかけは、パリにあります。パリで印象派の作品に出会い、それらを研究することで、次第に「明るい色調」へと変化していきました。19 世紀後半にパリでブームとなっていたジャポニスムの影響を受け、浮世絵から「大胆な構図」を学びました。次に取り入れたのは、「厚塗り」です。アドルフ・モンティセリ(1824 年頃～1886 年頃)という画家から、厚塗りによって生まれる、重厚感あふれる作風を吸収しました。こうしてゴッホは、パリで「明るい色調」、「大胆な構図」、「厚塗り」という、新しいスタイルを身につけました。そして、アルルに移り住むのです。たった1年の生活でしたが、そこでゴッホは、またひとつのスタイルを得ます。それは、「黄と青の強烈なコントラスト」です。アルルとその周辺の風景は、太陽の日差しを浴び、黄土色や黄色がかった色調をしています。麦畑やひまわり畑もあり、風景を描くと、おのずと黄色



『ラ・クローの収穫風景』
1888 年／ゴッホ美術館蔵

系統の絵の具を多く使うことになります。ゴッホの色彩へのこだわりはとても強く、もともと探求心旺盛な彼は、そこで閃き、「これでいける」と、何かを感じ取ったのでしょう。それに加えて、空の青、夜空の青、そして、黄色をより引き立たせる色として、青が最適だと確信したのです。「明るい色調」、「大胆な構図」、「厚塗り」+「黄と青の強烈なコントラスト」……ここアルルで、ゴッホの作品は誕生しました。これら4つの要素を持ち合わせた画家は、他にいません。ゴッホが研究に研究を重ねて辿り着いた、独自の画風です。



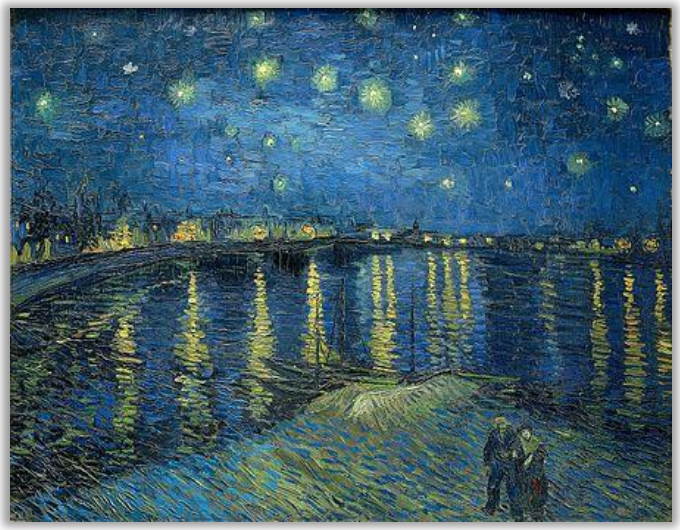
『黄色い家』
1888 年／ゴッホ美術館蔵

■ ゴッホが描いたアルルの3作品

では、ゴッホが描いたアルルの風景作品を鑑賞してみましょう。また、ゴッホはアルルで、さらに深化しました。それは「新しい題材」との出会いによるものです。

・『夜のカフェテラス(1888 年)』、『ローヌ川の星月夜(1888 年)』

『夜のカフェテラス』
1888 年／クレラーミュラー美術館蔵



『ローヌ川の星月夜』
1888 年／オルセー美術館蔵

この2作品は、絵画史上、画期的な作品です。それは、“夜を描いた作品”だからです。しかも、ゴッホは夜を表現することよりも、光と夜のコントラストから生まれる明るさを表現しようとしました。『夜のカフェテラス』では、お店の明かりという人工的な光、『ローヌ川の星月夜』では、月明りという自然の光を表現しています。どちらも見事にその光が表現されており、印象的です。『夜のカフェテラス』で描かれたカフェは、今でも現役で営業しています。周辺の建物もあまり変わっておらず、当時を偲(しの)ばせてくれます。『ローヌ川沿いの夜』は、月明りがあってもかなり暗いのですが、そんな夜の風景が絵になるわけがないだろう……というのが、一般的な見方でしょう。しかし、ゴッホはそれを覆し、見事な作品に仕上げたのです。先ほど述べました「明るい色調」、「大胆な構図」、「厚塗り」、「黄と青の強烈なコントラスト」、プラス、ゴッホはアルルで「新しい題材」を発見しました。これにより、ゴッホらしさがいっそう強固なものとなったのです。

・『アルルの跳ね橋(1888 年)』

当時の橋は現存しませんが、復元された橋が架かっています。ゴッホにしては穏やかな作品だと思いませんか。空の青さと運河の青さが見事に溶け合い、橋は落ち着いた黄土系で描かれ、橋の上を馬車が通り、洗濯で水面が動き、人の営みが感じられます。また、後方には糸杉(いとすぎ)でしょうか、南フランスの風景をイメージさせます。大胆というより、安定感のある構図です。この作品が好きな人は多いのではないでしょうか。黄色と青色を控え目に着色しているところも、この作品の特徴です。私は、この跳ね橋に2度、訪れたことがあります。アルルの街から3km ほど離れていて、周りに何もない場所に、ひとつだけ橋がかかっています。1回目はアルルからヒッチハイクで、2回目はツアーバスで行きました。

『アルルの跳ね橋』
1888 年／クレラ―ミュラー美術館蔵

復元された「ヴァン・ゴッホ橋」

■ ゴッホが後世に与えた影響

さらに驚くべきことは、後世への影響です。ゴッホの作品からヒントを得た画家は数多く、その一例を挙げますと、フォービズムを代表する画家のモーリス・ド・ヴラマンク(1876 年～1958 年)がいます。ゴッホ作品の強烈な色彩や力強い筆致に、ヴラマンクは圧倒されました。ヴラマンク自身も、そのような作品を描きたいと思っていたのでしょう。しかし、周囲にそのような絵を描く人がいなかったため、「自分の進むべき道は果たして合っているのだろうか」という迷いを感じていたのです。そんな迷いを吹き飛ばし、彼を後押ししたのが、ゴッホの作品でした。そのヴラマンクから直接指導を受けた日本人画家の佐伯(さえき) 祐三(ゆうぞう)(1898 年～1928 年)にも、この影響が受け継がれていきます。日本では、油絵を「厚塗り」のイメージを持つ傾向にありますが、その系譜は、ゴッホへと辿り着くのです。油絵＝「厚塗り」のイメージを定着させた原点はゴッホの作品にある、と言っても過言ではありません。また、アンリ・マティス(1869 年～1954 年)は、最初フォービズムに傾倒し、その後、独自の色調に変化していきましたが、色彩のコントラストに気づかされたのは、ゴッホの作品を通してでした。このように、ゴッホの作品は後世の画家や絵画の世界に大きな影響を与え続けているのです。

ゴッホは“炎のような画家”、ゴッホの作品は“感情の爆発”、“燃え上がるようだ”……。画家自身をそうイメージされる方も、いるでしょう。しかし、ゴッホの作品は大胆でありながら、実に繊細に描かれています。勢いで一気に描いたのではなく、一筆一筆、丹念に描きこんでいます。これは感情の爆発ではなく、炎のような画家というよりも、とても繊細で精緻な画家だと言えるでしょう。ゴッホの作品は、間近で観ると、その繊細さがよく分かります。画集やメディアだけではなく、実際に近くで鑑賞していただきたいです。

『ひまわり』
1889 年／ゴッホ美術館蔵

■ ゴッホとアルル

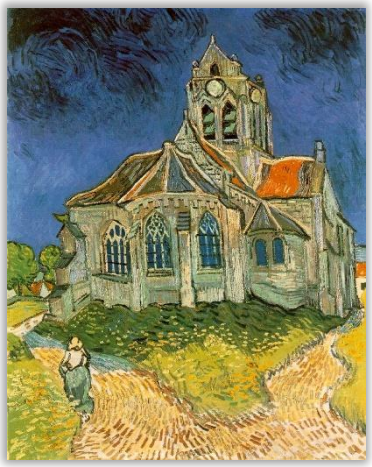
アルルのカフェ

ゴッホの名画の大部分は、このアルルで描かれた作品です。たった1年の生活でしたが、ゴッホ作品の集大成がアルルで誕生したと言っても良いでしょう。ゴッホは 37 歳の若さでこの世を去りましたが、もし長生きしていたなら、ゴッホの作風はどのように変化していったのでしょうか。私は、このままでいてくれたらいいな、と思います。アルルの世界遺産とゴッホを直接、結びつけるものはありません。しかし、アルルをいう街が人を惹きつけるという意味では、多いに貢献しています。アルルを観光バスで訪れると、ガイドの話の半分は世界遺産の関連施設、残りの半分はゴッホに関する話です。他の世界遺産については、その街の歴史や遺跡に関する話が中心ですが、アルルだけは異なります。ガイドの説明の半分をゴッホの話題が占めるほど、ゴッホの影響は深いのです。もし、ゴッホがローマ遺跡やロマネスク建築のサン・トロフィーム教会を描いていたなら、「あれがゴッホの描いた世界遺産です！」とガイドの説明に箔が付くでしょうね。アルルのローマ遺跡とロマネスク建築が世界遺産に登録された 1981 年よりも前に、アルルは既に「ゴッホ絵画誕生の地」となっていました。つまり、世界遺産登録よりも古くから、ゴッホの存在はアルルと結びついていたのです。絵画ファンにとっては、ゴッホ絵画の聖地とも言えるアルルが、世界遺産の街として注目を浴びるようになったことは、喜ばしいことかもしれません。

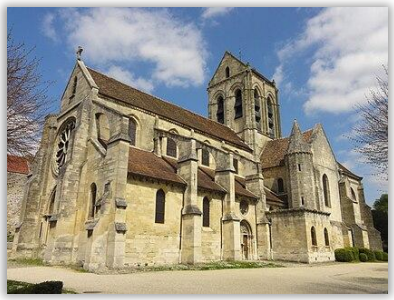
沼田政弘

■ ちょこっとコラム

ゴッホの聖地は、アルルの他にも、もう1カ所あります。それは、パリから北東へ約 30km 離れた、オーヴェル・シュル・オワーズという街です。ゴッホ終焉の地として、知られています。この街は、セザンヌやヴラマンクも暮らし、画家にこよなく愛された街でもあります。ゴッホはアルルを離れた後、この街で暮らし、オーヴェールの教会などを描きました。



『オーヴェルの教会』
1890 年／オルセー美術館蔵



オーヴェルのノートル・ダム教会

ゴッホと弟テオのお墓

もう 20 年以上前の話ですが、私が 37 歳の時、元旦の1月1日に、この街を訪れました。雪が舞い散り、とても底冷えのする日でした。パリから電車で向かいましたが、駅舎はとても小さなものでした。かなり寒かったので、駅前の一軒しかない古めかしいカフェで暖を取ってから、街を歩き始めました。ゴッホが描いたオーヴェルの教会は、駅の目の前の高台に建っています。小道を進み、階段を上ると、その姿が現れます。第一印象は、なんと不気味な感じのする教会だというものでした。教会の扉を押したら空いたので、中に入ってみましたが、誰もいませんでした。ちょっと「ぞわっ」としたので、すぐに外に出ました。その後、雪道を進み、ゴッホと弟のテオが眠るお墓を訪れました。さすが元旦、雪景色の中で周囲を遠く見渡しても、そこにいたのは私と家族だけでした。ゴッホがこの地に眠ったのが 37 歳だったのを思うと、少し神妙な気持ちになりました。ゴッホ・ファンの方は、ぜひ一度、訪れてみてください。